
朱璽と鯨

浅井健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱璽と鯨

【Nコード】

N8858Y

【作者名】

浅井健一

【あらすじ】

6世紀頃の古代日本を舞台にした小説です。

巻

男根を切り落とされたようだ。

逃げていく男の股間からは血が溢れていた。それだけで、尋常ではないことが起きたと分かる。偶然擦れ違った古瀬丸は、男の発情した加古鳥かこどりよりも酷い声に耳を塞いだ。夜ならば目が覚め、昼であれば漁に出た舟が帰ってくる、そのような声だった。

砂利の浜辺に建つ小屋から男は転がり出た。古瀬丸は男の後ろ姿こせまるを見て、遠からず死ぬのではないかと思った。男根を失っては、邑では生きていけないだろう。古瀬丸は男の昨日までの意気軒昂とした姿と、あの萎んでいく姿を頭で繋げようとしたが、上手くはいかなかった。男が死ねば、古瀬丸にとって二度目になる。

夏前の、空気の澱みが激しい季節。曇り空と鈍色の空、風も波も優しくはない。小屋のほうを振り返ると女が佇んでいた。浜辺の小屋は「海津屋」と言い、祭事にのみ使われる。その小屋に女がいることに古瀬丸は驚いた。墨を溶かしたような黒衣を纏い、神巫女の貝腕輪や石飾りを身に着けている。左手に持った青銅製の逆剣には、切断された男根が突き刺さっていたが、表情には嫌悪も恐怖もない。妖艶な、と都府の者なら言い表すだろう。美しい顔立ちと化粧のもたらす色香に、古瀬丸の警戒心が和らぎそうになった。あれは大王の使者だ。大人たちが話していた「璽師様」、それだと気付く。

「ちんこ」

「そつだよ、坊や。魚の餌にしておやり」

女は微笑むと、逆剣を振るって古瀬丸の足下に放った。

「璽師様」

「良く知っているね」

「大人が話していた。大王の使者が来ると。それは璽師様と言うらしい。でも、璽師様が女だとは思わなかった。女はその小屋について

は駄目だ」

「女は駄目なのかい」

古瀬丸は頷いた。

「だが、代々の鹽師は那岐邑で役目を果たしてきた。大王の意を受けた者を、男が犯そうとするなど前代未聞のこと。古来からのしきたりを忘れているのは、邑のほうではないのか」

鹽師の言葉に古瀬丸は黙ってしまふ。

那岐邑なぎのむらは漁民が細々と暮らしているだけの集落だった。海原に繰り出し漁を営む集落は、那岐邑の他に三十を数えたが、大王の使者が訪れるのは他にない。何十年か何百年かに一度、「鹽師」と呼ばれる者が大王の命を受けて那岐邑に来る。だが、百年前に訪れた時を最後に鹽師の来訪は途切れ、記憶を有した者はみな死んだ。

昔語りだと誰もが思っていたが、その鹽師が現れたのは昨日のことだった。衛士が担ぐ輿に乗り、鹽師は漆黒の衣、恐ろしげな仮面と竹で編んだ笠という異形の出で立ちをしていた。呪いにより災いを為す鬼道師の姿。邑人の多くが忌み事のように住居に閉じ籠もる中、長老と数人の男だけが彼らを砂利浜の小屋へと案内した。砂利浜の小屋は邑人にとって海神の住まいである。そこに鹽師は籠もり、衛士はしきたりに従い邑を出た。

鹽師が女であると知れたのは、つい数刻前のことだ。覗き見た者がいたのだらう。怪異な仮面の裏に、都府の女の顔があると知って男たちは色めきたった。大王の使者であつても女は女であり、女は男よりも卑しい存在だったので、男たちが鹽師を犯す相談をはじめた。魚と女は叩けば大人しくなるから、無理矢理押し入り立ち替わり犯せばいい。鹽師の肌を想像して順序を言い争う男たちを長老は黙認していた。長い年月が君臣の境を薄れさせたか、それとも那岐邑を乱す女に悪意を抱いたからか。

第一に選ばれたのは、邑で最も体躯の大きな男だった。魚の腕も良く、腕力と声の大きさに、長老の息子を常に圧倒していた。酒の勢いもあつてか、彼はさっそく行動したようだ。だが、小屋に押し

入り女に襲いかかろうとした瞬間、剣が股を貫いていた。

後は古瀬丸が見たままだ。

男根を拾った古瀬丸に、女が問い掛ける。

「坊やは幾つだ」

「十か九」

「名前は何という」

「古瀬丸」

「そう。では古瀬丸、長老を呼んできてちょうだい」

有無を言わせない口調に、古瀬丸は長老の元へと走らされた。

逃げた男の血と尿の跡を追う。古瀬丸は邑人が集まる広場に辿り着いたが、そこで人の声とは掛け離れた叫びを聞いて身震いした。

血まみれの男を皆が無言で囲むのは、雲が沈む空気の下では恐ろしげな光景に映る。邑人が見ているものを、苦しみのあまり男が身体を曲げたまま痙攣しているのを、古瀬丸は共有した。痙攣は死が近い証拠だ。古瀬丸はそれを知っていた。

助からない。だから誰も、あえて手を出そうとはしなかった。哀れとは思っても、死の穢れを被ることは何にも増して恐ろしい。

邑人の中に長老を見付けた古瀬丸は、その手を掴んだ。

璽師様が呼んでいる。

長老の顔が硬直した。触れることを避けるために、瀕死の男に網が被せられる。死者を弔うための喪屋もがりやか、傷の平癒を願うための草屋のどちらに男を運ぶかは、長老が決めることだったが何も言おうとしないので、男たちは互いに穢れや祟りのことを囁きはじめた。

璽師の意図を誰も推し測れないようだ。女が男を殺傷するなど、那岐邑ではあるはずのない出来事だからだ。

「海様が怒る」

その言葉に長老は反応した。

「言うでない」

「しかし、女が男を刃で刺すなど、あつてはならないことだ。早く手を打たねば、海様に知られどのような災いが」

「この天気も、海様が女を嫌っているからでは」

「大王の使者は海様を知らんのじゃ」

邑人の不安が、女への敵意に変わるのに時間は必要ないようだ。那岐邑のように大王の都府から遠いと、人は君主の徳よりも神霊への畏怖に流されやすい。そして長老は邑人を宥めようとしつつも、鹽師の側に立つて鎮めるつもりがなかった。忌み事と女への蔑みを一通り聞いた長老は、邑人を引き連れて海津屋に向かうことにした。大王の使者に対する作法として、膝を折り、砂に額を擦りつける。しかし、他の者は立っただけだ。

「参りました」

小屋の中から声がする。

「騒々しい」

「皆、海様と鹽師様を恐れております」

「海様とは海のことか」

「はい」

「海を人のように扱っても、人のようには御せまい」

「それは」

「意に沿わない者を害すのは、海も大王も同じであるぞ」

女が現れる。

長老はまだどうにでもなると考えていた。男たちは契機があれば復讐心と欲望を満たそうとするだろうし、鹽師は一人、しかも女だった。だが、小屋から現れた鹽師は仮面を被り、邑人を前に何の躊躇もなく長老の白髪頭を踏みつけた。男たちの顔に動揺が走り、古瀬丸には目の前で展開されていることが理解できなかった。邑の長老が女に踏まれるなど、人が魚に釣り落とされる以上のものだ。信じがたい鹽師の行為に男たちは激発するかと思っただが、真逆の力が働いた。

鹽師の肌は日を知らないかのように白い。それなのに、背だけは誰よりも高かった。誰も身動きしないのは、穢れや祟りを忌む心を鹽師の怪異な姿が捉えて離さないからだ。それは長老も同じだった。

頭を踏まれ、顔面を砂で汚したまま、汗だけが滴り落ちている。

女は波音に似た抑揚で、長老に言葉を下した。

「あの男は天津罪あまつつみを犯した。よって助けを禁ず。野へ捨てておけ」

「はい」

「名は何という」

「那岐邑の長老、餌彌彦えみひこと申します」

「そう。では餌彌彦に告ぐ。那岐邑が大王の意を忘れしを断ず。なおかつ大王の祭事を邪魔するなど、九族を誅しても償えぬと知れ。

餌彌彦は汚彦おひこと名を変えて、死ね」

女を犯すことが罪と、それも極刑に値すると言われ、邑人たちは息を飲んだ。

長老は声を絞った。

「なにとぞ、なにとぞ」

「汚彦、死なねば邑はないぞ」

仮面の鹽師は長老の白髪頭から足を外すと、呪い言葉を呟きつつ小屋へと隠れた。身体を起こした長老は蒼白な表情で小屋を見ていたが、振り返ると邑人たちが波の引くように距離を取る。誰ともなく恐ろしいと呟いたので、古瀬丸には何かの事情があるのだと察せられた。

邑の男たちが黙したまま權を手に取る。鹽師の呪い言葉が邑全体に及ばないため、するべきことは唯一つしかない。呆然としていた長老に權が振り下ろされた。一度殴れば、後は二発も三発も変わらない。男たちは自らの罪を分散するように、大きな魚を仕留める要領で、何度も打ち据えた。

長老は簡単に死んだ。

その身体に網が被せられ、喪屋へと引き摺られていく。

男らのなかで最も年上の者が、小屋の前で平伏した。

「汚彦は死にました」

「そうか」

鹽師は小屋から出ると、平伏した男の頭を踏んだ。身震いし、声

を出しかけた男に体重を傾けていく。この邑の者は皆、頭が高い。恐れているのは口ばかりのことではないのか、と女は言った。廻りの男たちも雷に打たれたように平伏す。璽師はそれを次々に踏んでいった。左腕に持った逆剣の先が、気紛れに男の背を傷付ける。そして砂利浜に降り、年長の男の前に立った。

「名は何という」

「玖廬くろと申します」

「そう。では玖廬に告ぐ。玖廬が長老となり那岐邑を治めよ」

都府の女は簡潔に言つと、小屋に戻ろうとした。その時、平伏した男の一人が顔を上げて何かを叫んだ。男は死んだ長老の長子だった。

だが、言葉が意味を持つ前に、女の逆剣が口の中に突き刺さっていた。

息が途切れるよりも早く、男の命が失われる。笛を鳴らすような声が、海鳥の鳴き声に変わり、砂の中へと埋もれていった。釣り上げた黒魚の血を抜くよりも鮮やかな剣の冴え。その手管を、平伏した男らは気配のみで察し、恐怖に震えた。

「穢れ者をこれ以上増やしたくはあるまい」

女はそう呟くと、小屋へと戻った。

式

「璽師様は恐ろしい御方だ」

酒を飲みながら父が愚痴るのを、古瀬丸は囲炉裏の温かさが届くか届かないかのところから見ていた。瓢箪に米と唾を入れて発酵させたものを、日が沈んでからずっと飲んでいるのだ。母は二年も前に死んでいた。古瀬丸は酒を飲む父が嫌いだ。

銚で魚を突き、あるいは海に潜り貝を獲る。そうして得た海産物を、女らは近隣の邑々に出向き米や布、生活用品などと交換した。那岐邑は漁を生業とする者の邑だが、自生した穀物や果物を集めたり、狩りに出向くこともあった。稲作はしないが、米を原料に酒を造るので、小さな米倉が一つある。米を噛み砕いて酒を造るのは女の仕事であり、男は漁業以外のことに従事することは禁じられていた。海と人との関係が「穢れる」からだ。同様に、女が漁をすることも禁じられていた。

酒は海で冷えた身体を温めるために欠かせないが、古瀬丸の父は楽しみとしてもこれを飲んでた。父が酒を飲み始めたのは、海に深く潜るようになって身体の節々が痛くなるためにだ。痛みを鎮めるために飲み始めた酒は、今では得た魚のほとんどもを注ぎ込むまでになっていた。指や腕の震える父の姿が古瀬丸には心配でならないが、嫌いな理由は他にある。

酒は父の凶暴な一面を容易く引き出すのだ。

「丸」

父は古瀬丸を「丸」とだけ呼ぶ。

古瀬丸は「とと」と父を呼んだ。

「はい」

「璽師様は恐ろしい御方だ」

「女なのに」

古瀬丸は男が女を従えて当然だと教えられてきた。

教えたのは父だ。母が死んでからずっと、父は魚獲りや舟の漕ぎ方よりも、男と女の差を言い続けた。那岐邑は男の地位が高いものの、父ほど女を蔑む男はいない。忌み事に係わること以外に巢喰う感情があるようだが、壘師の存在は父を弱気にしていた。

酒を呷り、囲炉裏の火が染める父の赤ら顔は、怪物の洞穴にいるのと同じ思いを古瀬丸に強いた。直接的な危害に震えるのは父も子も変わりがない。変わるのは対象だけだった。女だから恐ろしい。父は囲炉裏を見詰め、母の名を呟いた。そして空になった瓢箪を古瀬丸に投げつける。

古瀬丸はそれを避けなかった。

避ければ殴られるからだ。瓢箪は古瀬丸の右肩に当たり、地面を転がる。痛みを感じないように爪を太股に立てていて正解だった。古瀬丸が俯いたまま動かないので父は氣勢を削がれたようだ。感情をできるだけ薄めれば、身体も見えなくなるとまでは考えない。だが、泥酔した父を眠らせる最善の方法ではあった。

筵を被り、横になった父が鼾を掻きはじめのを待って、古瀬丸は動いた。

まだ夜は肌寒い。

しかし人知れず動くには良い空気だった。物音を立てないよう住居を出ると、藁葺き屋根に隠した釣り竿を担ぐ。浜辺への道は夜に閉ざされていたが、古瀬丸は確かな足取りで歩いた。樹々の覆いを抜けると月が地上と海を照らす。昼間、空を蓋した不吉な雲は、夜になって西へと流れたようだ。

古瀬丸は夜釣りをするのが習慣になっていた。父から逃れるためだったが、暗い海の波揺れに細かく反射する月光を見ると、心が癒されるのを知った。夜の海に釣り糸を垂らし、潮音に身を委ねるのは古瀬丸の密かな楽しみだ。

海津屋は静まり返っている。寝ているのだろうかと思ったものの、男根を切り落とされた男の姿は古瀬丸の脛に焼き付いていたので、中の様子を伺う気はなかった。古瀬丸は壘師をどう見ればいいのか

分らない。那岐邑を乱すのは悪いことでも、嫌いにはなれなかつた。

古瀬丸が釣り場に行っているのは、浜辺の横にある「男岩おいわ」という岩石だ。男岩は巨大な石の塊で、海に張り出している。砂利の浜は海に入るとすぐに深くなり、魚の世界へ行き着く。男岩に登った古瀬丸は、駕籠を脇に置くのと海の様子を見詰めた。素足は浜虫の何匹かを踏み潰していたが、あまり気にはならなかった。今日は魚が多いような気配がして、胸が高鳴る。

古瀬丸は懐から男根を取り出すと、糸に括り付けて竿を振るつた。波を月が干にも分かち、黒い海に光の道を作りだしている。古瀬丸には漁民の耳が自然に備わっていた。海中を泳ぐ魚の気配を感じる力。釣りは海様の声を聞き続けることだと那岐邑の人は言うが、それは正しい例えと思う。余計なことを考えず、じっと待つのが釣りだった。

しかし、男根などが餌になるのだろうか。海様は女を嫌うから、相応しいとは思えるけれども。

糸に結ばれた男根を、魚が食らいついたのを感じ、古瀬丸は竿を引いた。強い手応えは期待を持たせたものの、釣れたのは青魚あぢなだった。青魚は那岐邑では腐魚とも言われている。死ぬと瞬く間に腐るからで、古瀬丸は尾鰭を震わせる青魚を掴むと、爪で腹部を抉りハラワタを抜いた。

これで少しは長持ちする。

「釣れるのかい」

不意に話しかけられて、古瀬丸は振り向いた。

「鹽師様」

「我は釣れるのかと訊いているんだよ」

「釣れます」

鹽師は微笑んだ。呪者の黒衣は変わらないが、恐ろしげな仮面を被っていない。それは他人の目を気にする必要がない以上に、暗闇の中で仮面を被れば歩くところではないからだろう。男の股間を切

り裂いた逆剣は腰に吊り下げ、火の灯る小壺を手に持っている。那岐邑にはないものだったので、呪いの道具と古瀬丸は思った。

油壺に布を挿したものだと言師は説明したが、古瀬丸にはその便利さが良く分らない。火は父のいる住居を思い起こさせるので、あまり好きではなかった。女は古瀬丸の脇に立つと、釣り竿の糸が海の波間に消えるのを見詰めた。古瀬丸は女が近くにいと、魚が釣れなくなるのではと心配したが、竿から手応えが伝わった。

今度は魚も強情だ。古瀬丸は竿を持つ手に力を籠めて、餌を喰わえた魚が泳ぐ向きを変えるのを待つ。そして、魚が向きを変えて不意に力が緩んだ瞬間、一気呵成に釣り上げた。

釣れたのはゼイゴ魚だった。

「面白いように釣れるね」

「たぶん、海様の機嫌が良いんだ」

そうでなければ女がいて、魚が釣れるはずがない。

海様は嫉妬深いから女が近寄るのは駄目だ、と古瀬丸は言師に言った。言師は怒るでもなく微笑んだが、それは邑人が自分をどう見ているかを悟ったからだ。土地には土地神がいて、海には海神がいる。那岐邑の人々にとって海は豊漁をもたらす恵みであると同時に、荒れ狂う災いでもある。海を軽んじれば生きてはいけないと考えるのも無理のないことだ。

大王の徳が那岐邑にまで行き届いていれば、あるいは男が海津屋に押し入るといふこともなかっただろう。言師が邑に遣わされるのは百年ぶりと聞いていた。それだけの時間に隔てられていれば、邑人の視線が奇異と畏怖に歪められていても不思議なことではない。

言師は「海様」に興味を持った。

「古瀬丸は、海様を見たことがあるのか」

「どうして」

「死んだ汚彦が申ししていた。邑人らが海様を恐れていると。そこまでする神であるならば、女の我が近寄れば狂うたように怒鳴るに違いない。だが、我には波音は波の音にしか聞こえない。あるいは、

那岐邑の者だけが見える海様がいるのではと、そう考えたのだ」

「海様はいるよ」

古瀬丸は呟いた。

「見たのかい」

「見た」

糸に括り付けた男根が、魚に食い荒らされてしまった。良い餌だったが、こうなれば使い物にならない。古瀬丸は糸を外すと男根を海に投げ捨てた。これで鹽師の言葉通りの「魚の餌」だ。

鹽師を襲った男は草屋で一応の処置がなされたが、日が落ちる前に息絶えた。罪を犯した者を捨てておけと命じた鹽師の手前、男が息絶えたのは邑にとっては好都合だったのかもしれない。那岐邑では死者を棺舟に乗せて遠くへと流す。海の果てには海様の国があり、そこへ皆帰ると信じられていたのだ。

だが、男の死体は野原に捨てられた。網を被せ、長老と同じく那岐邑の外へと引き摺ったのだ。死体に触れるのは穢れを招く行為だった。だから、極力触れないために網を使う。野原に捨てられた死体は、山犬や鳥が食うだろう。

男根だけでも海様の国に帰れば、と古瀬丸は思わずにいられない。波音に耳を傾け、水が砂利に染みていくのを感じた。寒暖の定かではない空気が、古瀬丸の肌を撫でている。鹽師は手に持った油壺を下下に置いて、古瀬丸の意に反し、側を離れないようだ。

「海様は、我にも姿を見せてくれるかい」

「分からない。邑でも見たのは数えるほどだ。日が悪ければ何も見えない」

「日が良ければ」

「海様の灯火が一面に広がるんだ」

古瀬丸は糸に骨を削った釣り針を結び、浜虫はまむしを突き刺して海に投じた。

潮風だけの時間が過ぎる。鹽師は飽きずに夜の海を見詰めていた。それが古瀬丸には気味悪い。話すべきか迷い、考えるのは、男岩を

這う浜虫を捕まえるよりも難しかった。本当は海津屋へと帰ってほしかったが、そういう素振りを見せないで、古瀬丸は折れた。

「都府はどのようなところだ」

「都府かい。海がなく、畑もなく、山が囲み、人が多い。皆は大王の徳に従うが、悪い者もいる。呪いが流行ることもあるが、冬の次に春が来ることを心配する者はいない」

「嘘だ」

古瀬丸は笑った。

「なぜだい」

「海も畑もなく、どうして人が生きていける」

「都府には海がなくとも、ここに海があるではないか。畑もどこかにはあるだろう」

「そっか、そういうことか」

「おや、分かったのかい」

古瀬丸は鹽師が思うよりも賢い。

「大人が言っていた。海様から塩を戴いて魚を塩漬けするのは、都府に運ぶためだと。魚を運ぶのは女の仕事だから良く分からないけれど、都府で米や粟と交換したりもするよ。でも、魚が欲しいならなぜ海に行かないのだろう。塩漬けの魚なんて美味しくないのに」

「なぜだろうねえ」

鹽師は明確な答えを避けた。都府が栄えるために、漁業や耕作を営む者から富を奪っているなどと、古瀬丸に知ってほしくなかったからだ。女は鹽師の生業が、人の世に不可欠なものではないと弁えていたのだろう。

海の音を聴いた。

古瀬丸は月明かりの水面に視線を送った。

「鹽師様、海様の灯火だ」

神秘が鹽師の瞳に映る。それは言葉を失うという簡単な反応をもたらした。

海の奥深くから、青色の小さな輝きが何千万も現れたのだ。「海

様の灯火」と古瀬丸が言ったもの。波に漂う何かは、螢火を連想させた。海様を信じる古瀬丸が璽師の顔を覗き見る。螢のように、海中で光る生物がいるのだらうと思ったが、得難い光景であることに間違いない。

常世のものか。

星空と差のない水面の光は、枝垂れ雨。その先に灯火を飲み込む巨魁があつた。

「鯨だ」

と、目を凝らした古瀬丸が声を上げる。

光の渦の直中に、島のような巨体が浮き沈みするのを、二人は見た。

「我は、あの魚を狩りに来た」

そのように、璽師は言った。

漢儒かんじゆの書物に曰く、璽師は君主の側にあり璽じと朱を護る。

「璽」とは王たる者が持つ印のことであり、大漢たいかんの皇帝より下賜されるものだった。大王は璽を得て対外的な権威を臣と民に示す。璽師は朱を携え、璽を正しく用いるため、常に大王の側にあった。大王は詔勅によつて四方四海を治めるが、その意は璽印によつて証とされるのだ。

新たな璽が伝来すれば、璽師は新たな朱を求める。

大漢で「朱」と、この国では「丹」と呼ばれるものは顔料だ。希少にして有毒、山深くで採掘される水銀の元が辰砂であり、それを粉状にして朱を作る。人に位があり、璽に格があるように、大王の使う朱も璽師の秘伝が求められた。辰砂、銀泥、香灰、呪い言葉など八十三種を練つたものを「珠」という。

鯨は珠の練成に欠かせないものだ。璽師は自らの手で鯨を狩り、胆石と肺腑を得ることが古来より定められていた。

鯨を狩る、と聞いて古瀬丸は目を丸くした。

「都人は鯨が何か知っているのか。島ほどもあるのだぞ」

経験豊かな漁民であっても、鯨に手を出すのは余程に困窮したときに限られている。古瀬丸は過去に一度だけ鯨を食べたことがあった。その時は、衰弱して浜辺に打ち上げられた鯨を皆で分け合つたのだ。鯨肉は固くて生臭く、美味いという程のものではない。

「鯨の肉を得ねばならないほど、都府には人が多いのか」

「肉は所望していない。邑の皆で食べるがいい」

璽師は渦巻く光と鯨の黒影を見詰めながら呟いた。

都府の人は馬鹿か。古瀬丸はそのような視線を璽師に送り、竿を置いた。海が輝くと手頃な魚が釣れなくなるからだ。千万の光に誘われて鯨が出ると、青魚などは退散する。海様が機嫌を損ねたのだらう、と古瀬丸は解釈していた。とにかく女が隣にいとやりづら

い。

邪魔だったかと鹽師は問うたが、釣果はそこまで悪くない。魚が二匹ずつなら古瀬丸と父が食べる量としては十分だった。

古瀬丸は鹽師を見詰めたままだ。

「どうしたのかい」

「鹽師様は邑をどうしたいのだ」

鹽師を恐れる者は、鹽師の剣しか見ていないのだ。子供の目には、鹽師は鹽師であり女だった。女が海に係わるのは洩神的であり、鹽師の心が掴みきれない。鹽師は男の股間を斬り、長老に死を命じ、長老の子を殺した。ああいうことが、まだ続くのだろうか。

心配だった。父が鹽師の機嫌を損ねたら、と思うと。

「殺すのか」

「そういうことは逆に考えるといい。つまり『邑は鹽師をどうしたい』と」

古瀬丸は俯いた。邑は鹽師を邪魔者と思っている。

「我は鹽師の務めを果たすこと以外に、那岐邑をどうしようという意図はない。ただ、邑が鹽師をどう扱うかによって、我は応じているだけ。厚意であれば厚意を返そう。敵意であれば敵意を返そう」

「じゃあ、何もしなければ、何もしない」

「古瀬丸は頭が良い」

鹽師は白い手を伸ばして古瀬丸の頭を撫でた。

何もしなければ、もしない。古瀬丸にすら気付いたことを、那岐邑の者が気付いていればよいのだが。鹽師が夜中に海辺を歩いていたのは、古瀬丸に会うためではなかった。危険を避けるのが目的だ。だから鹽師は人気のない海へと向かい、偶然、釣りをする古瀬丸を見付けた。

大王の側にあると、人の機微が良く見える。どのような振る舞いに出れば恨みを買ひ、謀計、言葉の裏、仕草の意味を探り、先々を思案するのは衣服よりも身近なことだ。処世を誤れば死、足を踏み外さないのが都人の務めだった。例えば、怨嗟が募る邑で構えもな

く寝るなど、自ら滅ぼせと主張しているようなものだ。

だから、鹽師は海津屋を離れて様子を伺うことにした。

「邑の皆は鹽師様を恐れている」

「恐れているのは剣であつて、鹽師ではなかるう。理を知らぬ愚か者ども。三人死んだだけでは、海様のほうが恐ろしいと考えているかもしれない。海様は海だから殺せないが、鹽師は女だから殺せるなどと考えているやもしれない」

鹽師は黙ると油壺の火を消した。

古瀬丸の手を引き男岩から降りる。そして闇夜の色濃い、茂みの中へと入った。古瀬丸には感じられなかったが、海津屋の方から物々しい気配がしたのだと鹽師が囁く。

確かに海津屋の周囲には数人の男がいた。

茂みから海津屋までは五十歩の距離だったが、男たちが何をしているのかは一目瞭然だった。藁を小屋の戸口に置いて、火を点けるようだ。古瀬丸の口を塞ぐ。ここで騒がれては逃げてしまふばかりか、次の夜も警戒せねばならない。鹽師はこの一部始終を見て、けりをつけるつもりだった。

海津屋に入る勇氣はないらしい。鹽師を犯そうとした男の末路を思えば、あえて危ない橋は渡らないということだろう。やはり恐れは「鹽師の剣」であり「鹽師の呪」であり、「鹽師」そのものではないのだ。

大王が那岐邑に課した役割を忘れたのも、根は同じだ。何か、鹽師が軽んじられる遠因があつたのだろう。だからこそ、那岐邑のよくな僻地であっても、力持つ者の目と手が届くということを示す必要があつた。

鹽師は炎に包まれた海津屋を見詰めつつ、古瀬丸に呟いた。

「今日は、もうお帰り」

口を塞いでいた手を離す。抱かれたまま古瀬丸は鹽師に問い掛けた。鹽師が邑人を殺すのを見たくはない。古瀬丸は鹽師の腕の中で、酒気の赴くままに拳を振るう父とは、桁の違う大きさを感じていた。

炎が男らを照らしている。酒の勢いを借り、火の勢いに感情を昂ぶらせているようだ。古瀬丸は一心に「逃げる」としか思わなかった。焼け落ちる海津屋の中にいるはずの鹽師が、ここで見物している。鹽師は自らを殺そうとする者を、生かしてはおかない。徳を知らない人間が暴力を用いた場合、君子であれば対話を以て誤りを正すことができるだろう。人によっては退くことで無道を通すかもしれない。だが、鹽師がそうでないのは古瀬丸にも分かっていった。それでも古瀬丸は那岐邑の人間だ。

「殺さないで」

と、懇願した。

「お前はその言葉を邑の者にも言えるのか」

優しく、喜怒哀楽で言えば楽の声色で、古瀬丸の咽を真綿で絞める。理屈に合わないと言え諭しているようだ。鹽師が邑人に殺されるのは仕方ないが、邑人が鹽師に殺されるのは非道だと古瀬丸は考えているのか。

「そうじゃない」

「では、今から燃える小屋に走り寄って、奴らの行為を止めてみよ」

古瀬丸は俯いた。

九か十の子供には酷だったか。鹽師もそれ以上は言わず、古瀬丸を腕の中から解放した。筋を通すつもりがないのであれば、今宵のことは忘れるべきだ。鹽師の双眸は無言であるが故に多くを語る。

古瀬丸は下唇と無力さを噛み締めて、その場から逃げていった。

「嫌われたかねえ」

一人残った鹽師は溜息を吐くと、海津屋に火を点けた男らを見詰めた。那岐邑の男らに夜叉と憎まれても痛痒は感じないが、古瀬丸のような子供であれば話は別だ。ただ、鹽師は鹽師の役目を果たさねばならない。「さばき」と「ころし」は同じ三文字で語呂も良い。今日も明日も那岐邑は大騒ぎだ、と女は思ったが、明後日からは心安らかに務めに入れるはずだ。

一方、古瀬丸は竿と魚の入った駕籠を手に住居へと走っていた。

父は酔い潰れているはずだが、海津屋を燃やした男らに紛れていないとは言い切れなかった。もし、父がいなかったらどうしよう。古瀬丸の心臓は動悸よりも不安で一杯だった。父に壘師とのことを話して謝ってもらおう。でも、父が謝るだろうか。女だと蔑む父が、逸る気持ちを抑えて、竿と駕籠を隠すと、古瀬丸は住居に入った。そして安堵の溜息を吐く。父は筵にくるまって鼾を掻いていた。

父は漁の夢を見ているようだ。
丸、魚だ。魚がいるぞ。
と寝言を呟いている。

古瀬丸は少し涙ぐみながら、何もかも忘れて寝ることにした。次の日、海津屋が焼け落ちたという知らせが那岐邑を駆け巡った。海様の祟り、と慌てた声に、父が起き上がる。古瀬丸はすでに住居の外に出て、海津屋へと向かう邑人らを見詰めていた。昨夜のことを目にした今日では、海様への怖れを口にする男らが白々しい。

「どうした、丸」
「海津屋が燃えた」

父は気怠そうな顔を一变させて、まだ火の燻っている海津屋のほうを見た。

「女は」
「生きてる」
「焼け死んだと言うのではないか」
「でも、生きてる。壘師様は生きてるよ」

なぜ生きているのか、その理由を口にできないのがもどかしい。父は壘師を快く思っていないから、古瀬丸の言葉に耳を貸さなかった。昨夜、父が酔い潰れていなければ、どうなっていただろう。邑人は父の女嫌いを知っていた。海津屋に火を点けると誘い、父は二つ返事で応じたかもしれない。酒は嫌いだ、今は酒に感謝したくなる。

古瀬丸は父の腕を握ると、海津屋へと一緒に歩いた。燻る煙が海様への怖れと、壘師の死をかたちにしてているようだ。新しく長老に

なつたばかりの玖廬が、小屋を前にして祈っている。しきりに祟りを口にする男たちは、昨夜、茂みで見た者と同じだった。璽師様は自分を殺そうとした者らを殺すだろうか。

それだけが古瀬丸の気掛かりだ。

四

璽師は海様の祟りを受けて焼け死んだ。

そう玖廬は言った。大王の使者であるうが、海様を汚す者は海様が許さない。古瀬丸は玖廬が良く心得ているのを不思議に思った。周囲で祟り祟りと言い騒ぐ男らが、示し合わせたように視線を交わす。女が海様に係われれば、このように恐ろしい事態を招くのだ、と怖れを煽った。

「璽師は死んだ。那岐邑は海様と共にあるのだ」

「海様はお怒りになられている。このままだと魚が獲れなくなるぞ」
「恐ろしい、恐ろしい」

邑人は男女の隔たりもなく海に向かって土下座をした。璽師が近くで息を潜めていると知るのは古瀬丸だけだ。古瀬丸は璽師の直線的な恐怖に萎縮していた。対照的に、自らが火を点け、海様の祟りと騒ぎながら、璽師の生きているの知らない玖廬と男たちは居丈高な態度だ。

焼け跡に璽師の死体がないと分かれば、そのような顔もしていられないだろうに。

「丸、見たか。海様は女を嫌うんじゃ」

土下座をしたまま、父は言った。

「男らしくなれ、丸」

男は璽師に太刀打ちできないくせに。子供らしく振る舞う古瀬丸は、矛盾を飲み込むことに慣れていた。怯えたように父の腕を掴み小さく頷く。そうしていれば父の男気も晴れるし、玖廬に同調して騒ぎ立てるのも押さえられた。

海様の怒りは今日を境に晴れるであろう、と玖廬が言う。恐ろしいものが一つ減って、邑人らの間に安堵が広がった。海津屋は以前よりも大きく作り直すことに、璽師は消え失せたことに、男たちは決めた。衛士が璽師を迎えに来ても、知らぬ存せぬで通せばいい。

玖廬は地位を得て脅威を除き、何もかもが上首尾だと考えているようだ。

「しばらくしてから、漁の段取りを話し合いたい」

玖廬は立ち上がると、自らの住居へ歩いていった。その後ろを三人の男たちが続く。

「ウツボの玖廬」と、男は呼ばれていた。誰よりも深く海に潜り、岩陰に潜むウツボを捕らえるのが玖廬の得意な技だった。ウツボは獰猛な魚だ。玖廬の顎にはウツボが噛み付いた歯形が残っていた。

それを自慢げに撫でるのが癖だ。漁を終える年になりつつあったが、運良く長老の地位が転がり込んできたと思っている。その点だけは、璽師に感謝してもいい。

だが、榮譽は女に与えられたものだった。璽師がいる限り、玖廬は「女に言われて長老になった」という引け目を感じ続けることになるだろう。女が男よりも劣ると、那岐邑では誰もが考えているが、玖廬もまた同じだった。長老は本来なら男たちの合議によって選ばれる。それが女である璽師に選ばれたのであれば、邑への示しがつかなかった。

殺すか。

玖廬は酒を飲みながら決意した。璽師の剣は恐ろしいが、璽師そのものは女だ。那岐邑の男が女に傳かいたままで良いのか、と自らを奮い立たせた。凶暴なウツボを獲るには、巢穴に潜んでいるところを銚で突くのが良い。璽師が寝込みを襲えば、剣などないも同然だった。

そこまで考えて玖廬は男たちを呼んだ。同じ舟に乗り、漁を営む三人だ。他に女嫌いで知られる古瀬丸の父も誘おうとしたが、こちらは酔い潰れていた。他愛ない、と玖廬は憤慨したが、三人いれば女を殺すことなど造作もないはずだ。

玖廬は、囲炉裏の灰を鉄串で掻き混ぜながら、三人に打ち明けた。「璽師を殺す」

方法は海津屋に火を点けることにした。寝込みを襲うという案は、

それでも剣を恐れた三人が反対したためだ。殺せば何かと不都合が起ころるだろうし、海津屋ごと燃やしてしまえば海様の祟りにしやすい。そう相談した後、玖廬は囲炉裏の火を松明に移しつつ、人を殺すと思わずに、陸に上がった大魚を殺すと思えと言った。海でやる方法を、陸で行うだけだ。必ず上手くいく。

そして海津屋は燃えた。邑人は皆、これが海様の祟りであると疑わなかった。

「お前たち、良くやった」

玖廬は男たちをねぎらうために、住居で酒を振る舞おうと考えていた。これからのことを事前に話し合う必要があると感じていたからだ。まず、漁の段取りを決める席で、玖廬は改めて長老を選び直そうと提案するつもりだった。もちろん、他の者が長老になる目はない。改めて長老になれば「女に選ばれた」ことを払拭できるという思惑があつてだ。

三人にはあらかじめ支持に回るよう言い含めておく。その代価として、三人には舟主としての地位を与える。那岐邑の男には、長老、舟主、鋷人、水手の序列がある。漁の役割分担のためであるが、舟主ともなれば邑でも相応の発言権があつた。男根を切り落とされた男や、長老の息子、もちろん玖廬もそうだ。だが、壘師とのいざこざで二人が死に、一人は長老になった。空いた舟主の座を三人に分け与えれば嫌はあるまい。

玖廬らは住居の中に入った。

「おい、酒を」

と言おうとして、囲炉裏の側に座る女に目を見開いた。

「遅かったじゃないかね」

鉄串で灰を掻き混ぜながら笑う女は、昨夜、海津屋ごと焼き殺したはずの壘師だった。

「そのような場所に四人もいては窮屈であろう。遠慮せずに側へ」
後退りした男らを一睨みで竦み上がらせる。そして壘師は促して囲炉裏の周りに座らせた。明暗が分かれるとは、まさにこのことを

言うのである。朝の晴れやかな日射しはなく、玖廬の住居内は暗闇と囲炉裏の火がもたらす澱んだ空気に支配されている。

壘師の瞳にちらつく炎。鋭気を隠し、玖廬の心を赤裸々にするようだ。那岐邑の男が集まるまでに、壘師を消してしまわなければ。玖廬にはそれが、人の手で波を止めることのように感じられた。彼
私の差を比べるのも愚かしい。

「良く御無事で」

壘師は鷹揚に頷いた。

「海様が」

「海様」

「そう、那岐邑の皆が慕う海様が、女を嫌い海津屋に火を放った。だが、海様は海だから火の扱いには不得手であったようだ。我は海津屋から出ると、浜へ向かい海様にことの次第を問い質した。日輪の子である大王の命を受けた者を、独断で焼き殺すとは神々の道理にも背くのではないかと。海様は恥じ入って海の奥深くに潜っていた。女に言い込められて退散するとは、海様も存外にだらしない」

壘師は嘲笑すると、玖廬を流し見る。

「そのようなことを誰が信じる」

玖廬は那岐邑の誰もが奉じるものを愚弄され、怒りに声を荒げそうになった。

だが、機先を制したのは壘師の方だ。

「玖廬よ、私の言葉を違うというのか」

それは言葉の雷だった。

「違う、虚実、詐りと言うのであれば、確たる証拠を示せ。それとも事ここに至り、昨夜の炎は海様とは繋がらないと明かすのか。どちらでも構わないよ。祟りによって死んだはずの我が、お前の首を手にかかると練り歩くのだから」

目眩で壘師の笑顔が歪む。玖廬たちは海津屋に押し入った男の顛末と、汚彦と名を変えられた長老の末路を思い浮かべ、次は自らの

番であると悟ったようだ。海原ではどのような波にも怯まない男が四人もいて、吐息の近さにある鹽師に触れることすらできない。

死ぬのは嫌だ。鹽師は人を、蟹や浜虫を踏み潰すよりも容易く殺す。鹽師を海津屋ごと焼き払うという策が露見した今、状況は血肉を求める鮫に襲われる以上の際どさだ。

鹽師が手を伸ばし、玖廬の顎を掴む。

ウツボに噛まれた痕を髣乎る痛みに、咽から情けない声が漏れた。

「鹽師を海様の祟りで殺すのならば、お前は鹽師の祟りで死ぬべきではないのか」

恐怖から窒息してしまいそうだ。男の一人が喘いだ。

その喘ぎすらも鹽師の剣を誘うものになりかねない。玖廬は生きた心地がしなかった。だが、鹽師は玖廬の顎を掴んだまま、教え諭すように言葉を続ける。

「玖廬よ、死にたくないと後ろの者が言っておるぞ。身勝手なものではないか。己の邪さから海津屋を燃やした者が、海様に罪を被せ、殺すを厭いとわず、死ぬのは嫌だと言う。餓鬼畜生の道理からも外れた愚か者を、玖廬よ、お前は邑を率いる者としてどう考えるのだ」

「は、恥ずべきと」

「なるほど、恥ずべきか」

鹽師は玖廬の顎から手を離すと、立ち上がった。一刻前には海様に平伏した男たちが、鹽師にも同じ姿勢を取る。演技と本心からの違いはあったが。

「恥ずべきと知るならば、恥じて生きるがいい。そして鹽師が生きていることを皆に伝え、海様よりも大王の尊意をこそ重んじるべきであると熟知させよ。玖廬よ、顔を上げる」

「はっ」

鹽師は柿色に熱せられた鉄串の先を、玖廬の顔に近付けた。

「大王の使者を害する邑は、叛意ありとして九族を誅すことになっている。誅すとは、全身の生皮と爪を剥ぎ、目と耳を潰し、大王を讃える言葉を叫ばせながら野原に捨てて、鳥に啄まれて死ぬように

仕向けることを言うのだ。玖廬よ、お前も、その男らも、男らの妻も、子も、親もだ。死霊になっても消えることのない悔いと痛みを与えることを誅すというのだ」

「は、はい」

「お前たちは、誅すに足る罪を犯した。哀れなことよ。だが、海津屋を燃やしたのが海様であり、璽師が海様の非道を裁いたということに応じるのであれば、お前たちの罪まで誅するつもりはない。よく考えることだ。悪いのは、お前たちなのか、海様なのか」

「う、海様だ」

「海様が悪い」

「そうだ。海様が海津屋を燃やすからこのようなことに」

唯一の逃げ道を与えられて、男たちは窮した鼠の見苦しさを海様を非難した。

どこまでも愚かしい男どもよ。璽師はそう感じていたが、微笑みを崩すことはなかった。

「そうか、では海様は裁いた。お前たちは不問に付そう」

璽師は玖廬を残して男たちを下がらせた。住居の外で、命の有無を、肌を照る日によって感じていることだろう。玖廬は長老でありながら恨めしく思った。これから漁の段取りを決めるために、那岐邑の男が全て集まる。その場で玖廬は、璽師が海様の上にあると知らしめなければならぬのだ。

混然とした心情を整理できないまま俯く玖廬を、璽師はどのように洞察したのだろう。璽師の手が伸び、玖廬の手を取った。

都府の女の指は、なぜにこうも白く細いのか。日に焼けて節の目立つ那岐邑の女の手とは、名前も違うような気にさせられた。だが、その手が玖廬の左手に触れた瞬間、中指の爪が剥がれ落ちていった。

「あっ」

爪と皮膚が真逆に剥がれる。空気が刺す痛み、玖廬は叫んだ。「戯れだ」

他人の痛みは鳥の囀りよりも愉悦をもたらす。璽師は玖廬の耳元

で、
確かにそう囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8858y/>

朱璽と鯨

2011年11月29日22時46分発行